

◇卒業生のページ◇

アメリカ西部のステップにて

式 好 子

北アメリカ西岸のコースト、カスケード山脈とロッキー山脈に挟まれて、乾燥気候の地域がある。20年も昔に、松井先生の気候学でお教えいただいたケッペンの気候区分によれば、BSK、つまり中緯度ステップ気候の地域である。1972年の夏に、この乾燥地域の一部を横ぎる機会を得、かつてケッペンによって悩まされた事など、懐しく思い出した。カナダのヴァンクーヴァーからロッキー山中のジャスパーに向けて車で出発、フレーザー川を溯り、リットンより更にトンプソン川を溯り始めると、次第に乾燥の度合が増えて来る。下流域では川の中州にまで、まるで雑草のように針葉樹が密生していたものが、丘陵の山肌を覆う森林が次第に疎林となり、それに代って白茶けた、初めから枯れたような色の草が、モコモコと丸まったような形で一面に覆ってくる。その変化が刻一刻と短時間に、教科書のページをめくるようで面白い。厚い厚い堆積段丘の上は所々スプリングラで灌漑し、牧草地となっている。一面の茶色の風景の中で、目を洗うような緑の美しさである。その牧草を刈り取るのも勿論機械化され、トラクターで刈り取ると、車の後から四角く束ねられた草が、まるで高麗芝を束ねたような形になってポンポンと落ちてくる。車を操作する人以外に、ほとんど働いている人の姿は見えない。

カムループス湖は東西30余Kmの細長い湖だが、その西端の岩かげには小さいながらもサボテンが自生していた。北緯51°のこの近くでも、夏の日射は強い。シャツの上からでも刺すような熱が伝わって来る。カムループス湖の南側にあるいくつかの窪地は、一面に、あるいは周辺に真白に塩をたたえている。さながら北国とは思えない景観であった。カムループスの町を過ぎると、気候は又次第に湿潤となり始め、植生は次第に豊かになる。

カナディアン・ロッキーの旅の後、アメリカ・アイダホ州に入り、更にワシントン州のスポーカンから西に、ヤキマに向かった。

カナダで西から東に横切ったステップの南の続きを、今度はワシントン州の北緯47°～48°の地域を東から西に横切ることになった。このあたりはコロンビア溶岩台地の一部で、各所に玄武岩が露出し、見事な節理を見せている。丘陵性のカナダの場合と違って、全体にゆるやかな起伏の平原

で、耕地の模様も大きく、大きな車輪をつけた移動式のスプリンクラーで灌漑を行なっている。小さなオアシスを過ぎ、スーパーストアから100kmのリュッツヴィル近くで、小麦の刈取り後の畑であろうか、裸の耕地から突然土煙があがった。土煙は見る間に空高くたちのぼった。竜巻だった。驚いてあたりを見回すと、遠くに数本、すぐ道路わきに数本という具合に、できては消え、又新たにできる。家や家畜を巻き上げるほど大規模のものは無いように見えたが、何しろ高速で走っている車が巻き込まれたらどうなるのかと不安だった。草や小石を巻き上げながら道路の方に移動してきた竜巻は、道路わきの堤に遮られ、そこで前進をやめた。どうやらその堤は道路に対する防風堤であったようだ。ともあれ昼食のことも忘れ、夢中で竜巻地域を走りぬけた。

ヤキマ近辺は乾燥地の中の果物の産地である。枯草色の山の麓には灌漑により青々と果物の木が茂り、見事な対称を示している。自家製のジャムもおいしいし、ハイウェイ沿いの出荷場で果物を買えば、モモやナシが10kg 20という安さで買える。

レーニエ山に寄り、シアトルを通り、ヴァンクーヴァーに戻る約3,500kmのドライブであった。(4回生)

メ ッ シ ュ

岡 崎 セ ツ 子

都電がガタゴトと音をたてて坂を下っていく。その音も次第に銀杏の並木と共に後へ遠ざかっていくと、静かな、そして夏でも一寸冷えびえとした建物に近づく、そこがお茶大の地理の研究室。これも、もうこのごろでは何か遠い昔のことにきこえるが……。

この静かな赤レンガの建物の一階に、松井勇先生の研究室は在った。中庭には真赤なケシの花が一面に咲いたり、たんぽぽの黄色い花が全盛をきわめたりしていた。春休みの頃にはつくしん坊が、やせてはいるが沢山とれた。

朝はひととき木製の廊下の足音がたえないが、始業と共にしんと静まりかえる。すると、扉のすぐ向う側や、30m程先の廊下の立話も皆聞こえる。時刻ぴったり、松井先生の授業が始まると、隣の講義室からは、若々しいお声がきこえる。10年ほど以前、私はこんな静かな落ちついた日々、先生の下で気候表やグラフ、分布図、各種の統計表などをまとめていた。時には出張にも出かけた。勿論「那須野盆地」へ。真夏のどうしようもないほどの暑い日々とか、山には雪が真白く野は寒風が吹きあれる日々とか、秋のやわらかい陽光の中を紅葉の山々を眺めながら役場の統計を集めたり、